

運

芥川龍之介



目のあらひ簾すだれが、入口にぶらさげてあるので、往来の容ようす子は仕事場にいても、よく見えた。清水きよみずへ通う往来は、さつきから、人通りが絶えない。金鼓こんくをかけた法師ほうしが通る。壺装束つぼしようぞくをした女が通る。その後あとからは、めずらしく、黄牛あめうしに曳ひかせた網代車あじろぐるまが通った。それが皆、疎まばらな蒲がまの簾すだれの目を、右からも左からも、来たかと思うと、通りぬけてしまう。その中で変らないのは、午後の日が暖かに春あぶを炙あぶっている、狭い往来の土の色ばかりである。

その人の往来を、仕事場の中から、何と云う事もなく眺あめていた、一人の青侍あおざむらいが、この時、ふと思いついたように、主あるじの陶器師すえものつくりへ声をかけた。

「不相変あいかわらず、観音様かんのんさまへ参詣する人が多いようだね。」

「左様さやうでございます。」

すえものつくり

陶器師は、仕事に氣をとられていたせい、少し迷惑そうに、こう答えた。が、これは眼の小さい、鼻の上を向いた、どこかひょうきんな所のある老人で、顔つきにも容子ようすにも、悪氣らしいものは、微塵みじんもない。着ているのは、麻あさの帷子かたびらであろう。それに萎なえた揉烏帽子もえぼしをかけたのが、この頃評判の高い鳥羽僧正とばそうじょうの絵巻の中の人物を見るようである。

「私も一つ、日参にっさんでもして見ようか。こう、う、だ、つ、が上らなくちや、やりきれない。」

「御冗談ごじょうだんで。」

「なに、これで善い運さずが授さずかるとなれば、私だつて、信心をするよ。日参さんをしたつて、参籠さんろうをしたつて、そうとすれば、安いものだからね。つまり、神仏を相手に、一商売をするようなものさ。」

青侍は、年相応な上調子なもの言いをして、下唇を舐めながら、きよろきよろ、仕事場の中を見廻した。——竹藪を後にして建てた、藁葺きのあばら家だから、中は鼻がつかえるほど狭い。が、簾の外の往来が、目まぐるしく動くのに引換えて、ここでは、甕でも瓶子でも、皆赭ちやけた土器の肌をのどかな春風に吹かせながら、百年も昔からそうしていたように、ひっそりかんと静まっている。どうやらこの家の棟ばかりは、燕さえも巢を食わないらしい。……

翁が返事をしないので、青侍はまた語を継いだ。

「お爺さんなんぞも、この年までには、随分いろんな事を見たり聞いたりしたろうね。どうだい。観音様は、ほんとうに運を授けて下さるものかね。」

「左様でございます。昔は折々、そんな事もあったように聞

いて居りますが。」

「どんな事があつたね。」

「どんな事と云つて、そう一口には申せませんがな。——しかし、貴方がたは、そんな話をお聞きなすつても、格別面白くもございませんまい。」

「可哀そうに、これでも少しは信心気のある男なんだぜ。いよいよ運が授かるとなれば、明日にも——」

「信心気でございますかな。商売気でございますかな。」

翁は、眦に皺をよせて笑つた。捏ねていた土が、壺の形になつたので、やっと気が楽になつたと云う調子である。

「神仏の御考えなどと申すものは、貴方がたくらいのお年では、中々わからないものでございますよ。」

「それはわからなからうさ。わからないから、お爺さんに聞

くんだあね。」

「いやさ、神仏が運をお授けになる、ならないと云う事じゃございませぬ。そのお授けになる運の善し悪しと云う事が。」  
「だって、授けて貰えばわかるじゃないか。善い運だとか、悪い運だとか。」

「それが、どうも貴方がたには、ちとおわかりになり兼ねましようて。」

「私には運の善し悪しより、そう云う理窟の方がわからなそうだね。」

日が傾き出したのであろう。さつきから見ると、往来へ落ちる物の影が、心もち長くなった。その長い影をひきながら、かしら頭におけ桶をのせた物売りの女が二人、簾の目を横に、通りすぎる。一人は手に宿への土産みやげらしい桜の枝を持っていた。

「今、西の市で、いち續麻うみその麩みせを出している女なぞもそうでございますが。」

「だから、私はさつきから、お爺さんの話を聞きたがつているじゃないか。」

二人は、暫くの間、黙った。青侍は、爪で頤あごのひげを抜きながら、ぼんやり往来を眺めている。貝殻のように白く光るのは、おおかた大方さつきの桜の花がこぼれたのであろう。

「話さないかね。お爺さん。」

やがて、眠そうな声で、青侍が云った。

「では、御免を蒙つて、一つ御話し申しましょうか。また、いつもの昔話でございますが。」

こう前置きをして、すえものつくり陶器師の翁は、おもむろ徐に話し出した。日の長い短いも知らない人でなくては、話せないような、悠長な



口ぶりで話し出したのである。

「もうかれこれ三四十年前になりました。あの女がまだ娘の時分に、この清水きよみずの観音様へ、願がんをかけた事がございました。どうぞ一生安楽に暮せますようにと申しましてな。何しろ、その時分は、あの女もたった一人のおふくろに死別しにわかれた後で、それこそ日々にちにちの暮しにも差支えるような身の上でございましたから、そう云う願がんをかけたのも、満更無理はございません。

「死んだおふくろと申すのは、もと白朱社はくしゆしゃの巫子みこで、一しきりは大そう流行はやったものでございますが、狐きつねを使うと云う噂うわさを立てられてからは、めつきり人も来なくなってしまうたようでございます。これがまた、白あばたの、年に似合わず水々しい、大がらな婆さんでございましてな、何さま、あの容ようす子

じゃ、狐どころか男でも……」

「おふくろの話よりは、その娘の話の方を伺いたいね。」

「いや、これは御挨拶で。——そのおふくろが死んだので、後は娘一人の瘦せ腕やでございませぬから、いくらかせいでも、暮くらしの立てられようがございませぬ。そこで、あの容貌きりようのよい、利発者りはつものの娘が、お籠りこもをするにも、檻つづれ褸故に、あたりへ気がひけると云う始末でございました。」

「へえ。そんなに好いい女だったかい。」

「左様でございませぬ。気だてと云い、顔と云い、手前の欲目では、まずどこへ出しても、恥はしくなと思いましたかな。」

「惜あしい事に、昔さね。」

青侍は、色のさめた藍の水干すいかんの袖口を、ちよいとひっぱりながら、こんな事を云う。翁は、笑声を鼻から抜いて、また

ゆつくり話しつづけた。後の竹藪では、頬しきりうぐいすに鶯うしろが啼うないている。

「それが、三七日さんしちにちの間、お籠かごりをして、今日が満願まんがんと云う夜よに、ふと夢を見ました。何でも、同じ御堂おどうに詣まいつていた連中の中に、背むしの坊主ぼうずが一人いて、そいつが何か陀羅尼だらにのよなものを、くどくど誦ずしていたそうでございます。大方それが、気になったせいでございましょう。うとうと眠気がさして来ても、その声ばかりは、どうしても耳をはなれませぬ。とんと、縁の下で蚯蚓みみずでも鳴ないているような心もちで——すると、その声が、いつの間ことばにやら人間の語ことばになつて、『ここから帰る路で、そなたに云いよる男がある。その男の云う事を聞くがよい。』と、ことう聞えると申すのでございませぬ。

「はつと思つて、眼がさめると、坊主はやつぱり陀羅尼だらにさんまい三昧さんまいでございます。が、何と云つているのだから、いくら耳を澄ま

しても、わかりませぬ。その時、何気なく、ひよいと向うを見ると、常夜燈じょうやとうのぼんやりした明りで、観音様の御顔が見えました。日頃おかげ拝みなれた、端巖たんこん微妙の御顔でございしますが、それを見ると、不思議にもまた耳もとで、『その男の云う事を聞くがよい。』と、誰だか云うような気がしたそうでございませぬ。そこで、娘はそれを観音様の御告おつげだと、一凵いちすに思いこんでしまいましたげな。」

「はてね。」

「さて、夜がふけてから、御寺を出て、だらだら下りの坂路を、五条へくだろうとしますと、案の定じょうとうしろ後から、男が一人抱きつきました。丁度、春さきの暖い晩でございましたが、生憎あいにくの暗で、相手の男の顔も見えなければ、着ている物などは、猶なおの事わかりませぬ。ただ、ふり離そうとする拍子に、手

が向うの口髭くちひげにさわりました。いやはや、とんだ時が、満願まんがんの夜に当たったものでございます。

「その上、相手は、名を訊きかれても、名を申しませぬ。所を訊かれても、所を申しませぬ。ただ、云う事を聞けと云うばかりで、坂下の路を北へ北へ、抱きすくめたまま、引きずるようにして、つれて行きます。泣こうにも、喚わめこうにも、まるで人通りのない時分なのだから、仕方がございませぬ。」

「ははあ、それから。」

「それから、とうとう八坂寺やさかでらの塔の中へ、つれこまれて、その晩はそこですごしたそうでございます。——いや、その辺へんの事なら、何も年よりの手前などが、わざわざ申し上げるまでもございますまい。」

翁おきなは、また眦めじりに皺しわをよせて、笑った。往来の影は、いよいよ

よ長くなつたらしい。吹くともなく渡る風のせいであろう、そこここに散っている桜の花も、いつの間にかこつちへ吹きよせられて、今では、雨落ちの石の間に、点々と白い色をこぼしている。

「冗談云つちやいけない。」

青侍は、思い出したように、頤あごのひげを抜き抜き、こう云つた。

「それで、もうおしまいかい。」

「それだけなら、何もわざわざお話し申すがものはございませぬ。」翁おきなは、やはり壺つぼをいじりながら、「夜つがあけると、その男が、こうなるのも大方宿世すくせの縁ゆかりだろうから、とてもことの事に夫婦みょうとになつてくれと申したそうでございます。」

「成程。」

「夢の御告げでもないならともかく、娘は、観音様のお思召おぼしめし通りになるのだと思つたものでございますから、とうとう首かぶりをたて豎たてにたてふりました。さて形かたばかりの盃事さかずきごとをすませると、まず、当座あやの用にと云つて、塔の奥から出して来てくれたのが綾あやをびき十足びきに絹あなを十足あなでびきございます。——この真似まねばかりは、いくら貴方あなたにもちとむずかしいかも存じませんな。」

青侍は、にやにや笑うばかりで、返事をしない。鶯も、もう啼かなくなつた。

「やがて、男は、日の暮くれに帰ると云つて、娘一人を留守居るすいに、慌あわたしくどこかへ出て参りました。その後の淋あとしさは、また一倍であございます。いくら利発者でも、こうなると、さすがに心細くなるのであございませう。そこで、心晴らしに、何気なにげなく塔の奥へ行つて見ると、どうであございませう。綾や絹

は愚おろかな事、珠玉とか砂金さきんとか云う金目かねめの物が、皮匣かわごに幾つともなく、並べてあると云うじやございませぬか。これにはあ  
あ云う氣丈な娘でも、思わず肚胸とむねをついたそうでございませぬ。  
「物にもよりますが、こんな財物たからを持つてゐるからは、もう  
疑うたがはございませぬ。引剥ひはぎでなければ、物盗ものどりでございませぬ。  
——そう思うと、今まではただ、さびしいだけだったのが、急  
に、怖いのも手伝つて、何だか片時かたとときもこうしては、いられな  
いような氣になりました。何さま、悪く放免ほうめんの手にでもかか  
ろうものなら、どんな目に遭あうかも知れませぬ。

「そこで、逃げ場をさがす氣で、急いで戸口の方へ引返そう  
と致しますと、誰だか、皮匣かわごの後うしろから、しわがれた声で呼び  
とめました。何しろ、人はいないとばかり思つていた所でござ  
いますから、驚いたの驚かないのじやございませぬ。見る



と、人間とも海鼠なまこともつかないようなものが、砂金の袋を積んだ中に、円まるくなって、坐つて居ります。——これが目くされの、皺しわだらけの、腰のまがった、背の低い、六十ばかりのあまほうし尼法師でございました。しかも娘の思惑おもわくを知つてか知らないでか、膝ひざで前へのり出しながら、見かけによらない猫撫声ねこなでこえで、初対面の挨拶あいさつをするのでございます。

「こつちは、それ所の騒さわぎではないのでございますが、何しろ逃げようと云う巧みたくをけどられなどしては大変だと思つたので、しぶしぶ皮匣かわこの上に肘ひじをつきながら心にもない世間話をはじめました。どうも話の容子ようすでは、この婆さんが、今まであの男の炊女みずしか何かつとめていたらしいのでございます。が、男の商売の事になると、妙に一口も話しませぬ。それさえ、娘の方では、気になるのに、その尼あまがまた、少し耳が遠い

と来ているものでございますから、一つ話を何度となく、云い直したり聞き直したりするので、こつちはもう泣き出したいほど、気がじれます。――

「そんな事が、かれこれ午までつづいたでございましょう。すると、やれ清水の桜が咲いたの、やれ五条の橋普請が出来たのと云っている中に、幸い、年の加減か、この婆さんが、そろそろ居睡りをはじめました。一つは娘の返答が、はかばかしくなかつたせいもあるのでございましょう。そこで、娘は、折を計って、相手の寝息を窺いながら、そつと入口まで這つて行つて、戸を細目にあけて見ました。外にも、いい案配に、人のけはいはございませぬ。――

「ここでそのまま、逃げ出してしまえば、何事もなかつたのでございますが、ふと今朝貰つた綾と絹との事を思い出したの

で、それを取りに、またそつと皮匣かわごの所まで帰つて参りました。すると、どうした拍子か、砂金の袋にけつまずいて、思わず手が婆さんの膝ひざにさわつたから、たまりませぬ。尼の奴め驚いて眼をさますと、暫くはただ、あつけにとられて、いたようでございますが、急に気ちがいのようなになって、娘の足にかじりつきました。そうして、半分泣き声で、早口に何かしやべり立てます。切れ切れに、語ことばが耳へはいる所では、万一娘に逃げられたら、自分がどんなひどい目に遇うかも知れないと、こう云つてゐるらしいのでございますな。が、こつちもここにいては命にかかわると云う時でございますから、元よりそんな事に耳をかす訳がございませぬ。そこで、とうとう、女同志のつかみ合がはじまりました。

「打つ。蹴ける。砂金の袋をなげつける。——梁はりに巢を食つた

鼠ねずみも、落ちそうな騒さわぎでございませぬ。それに、こうなると、死物狂しぶつくるいだけに、婆ばさんの力ちからも、莫ば迦かには出来できませぬ。が、そこは年のちがいでございませぬ。間まもなく、娘むすめが、綾あやと絹きぬとを小脇こわきにかかえて、息いきを切きらしながら、塔たの戸口こをこつそり、忍しのび出でた時には、尼あまはもう、口くちもきかないようになって居ゐりました。これは、後あとで聞きいたのでございませぬが、死骸しかいは、鼻はなから血ちを少し出でして、頭あたまから砂金すなごを浴あびせられたまま、薄うす暗くい隅すみの方に、仰あおむ向けになつて、臥ねていたそうでございませぬ。「こつちは八坂寺やさかでらを出でると、町家ちやうかの多おほい所ところは、さすがに氣きがさしたと見みえて、五ご条京極きやうごく辺への知人しりびとの家うちをたずねました。この知人しりびとと云いうのも、その日暮ひぐししの貧乏人ひんぱんなのでございませぬが、絹きぬの一疋ひとへもやつたからでございませぬ。湯ゆを沸わかかすやら、粥かゆを煮ゆるやら、いろいろ経けい営えいしてくれられたそうでございませぬ。そ

こで、娘も漸く、ほっと一息つく事が出来ました。」

「私も、やっと安心したよ。」

あおきむらひ

おおき

すだれ

青侍は、帯にはさんでいた扇をぬいて、簾の外の夕日を眺めながら、それを器用に、ぱちつかせた。その夕日の中を、今しがた白丁が五六人、騒々しく笑い興じながら、通りすぎたが、影はまだ往来に残っている。……

「じゃそれでいよいよけりがついたと云う訳だね。」

おきな おおぎよう

「所が」翁は大仰に首を振って、「その知人の家に居りますと、急に往来の人通りがはげしくなつて、あれを見い、あれを見いと、罵り合う声が聞えます。何しろ、後暗い体ですから、娘はまた、胸を痛めました。あの物盗りが仕返ししにでも来たものか、さもなければ、検非違使の追手がかかりでもしたものか、——そう思うともう、おちおち、粥を啜つても

居られませぬ。」

「成程。」

「そこで、戸の隙間すきまから、そつと外を覗いて見ると、見物の男女なんによの中を、放免ほうめんが五六人、それに看督長かどのおさが一人ついて、物々しげに通りました。それからその連中にかこまれて、縄にかかった男が一人、所々裂さけた水干を着て烏帽子えぼしもかぶらず、曳かれて参ります。どうも物盗りを捕えて、これからその住家すみかへ、実録じつろくをしに行く所らしいのでございますな。

「しかも、その物盗りと云うのが、昨夜ゆうべ、五条の坂で云いよつた、あの男だそうじゃございませぬか。娘はそれを見ると、何故か、涙がこみ上げて来たそうでございます。これは、当人が、手前に話しました——何も、その男に惚ほれていたの、どうしたのと云う訳じゃない。が、その縄目なわめをうけた姿を見た

ら、急に自分で、自分がいじらしくなって、思わず泣いてしまったと、まあこう云うのでございますがな。まことにその話を聞いた時には、手前もつくづくそう思いましたよ——」

「何とね。」

「観音様へ願がをかけるのも考え物だとな。」

「だが、お爺じいさん。その女は、それから、どうにかやっけてけるようになったのだらう。」

「どうにか所か、今では何不自由ない身の上になって居ります。その綾や絹を売ったのを本もとに致もとしましてな。観音様も、これだけは、御約束をおちがえになりません。」

「それなら、そのくらいな目に遇つても、結構じゃないか。」  
外の日の光は、いつの間にか、黄いろく夕づいた。その中を、風だった竹藪の音が、かすかながらそこから聞えて

来る。往来の人通りも、暫くはとだえたらしい。

「人を殺したって、物盗りの女房になったって、する気でしたんでなければ仕方がないやね。」

青侍は、扇を帯へさしながら、立上った。翁も、もう提ひきさげの水で、泥にまみれた手を洗っている——二人とも、どうやら、暮れてゆく春の日と、相手の心もちとに、物足りない何かを、感じてでもいるような容ようす子である。

「とにかく、その女は仕合せ者だよ。」

「御冗談で。」

「まったくさ。お爺さんも、そう思うだろう。」

「手前でございますか。手前なら、そう云う運はまっぴらでございませぬ。」

「へええ、そうかね。私なら、二つ返事で、授さずけて頂くがね。」



「じや観音様を、御信心なさいまし。」  
「そうそう、明日あすから私も、お籠こもりでもしようよ。」

（大正五年十二月）

運

底本：「芥川龍之介全集1」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和 61）年 9 月 24 日第 1 刷発行

1995（平成 7）年 10 月 5 日第 13 刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和 46）年 3 月～1971（昭和 46）年 11 月

入力：j.utiyama

校正：earthian

1998 年 11 月 11 日公開

2004 年 3 月 9 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫  
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。